

平成 24 年度卒業論文

女性の美に関する考察

北海道教育大学旭川校
教員養成課程 社会科教育専攻 社会学ゼミ
学生番号 9311
國枝なつき

目次

はじめに

第1章 時代・世界による“美”の変化

- 1-1 時代による“美”の変遷
- 1-2 日本の化粧歴史
 - 1-2-1 古代（古墳時代：3～7世紀）
 - 1-2-2 飛鳥・奈良時代（6世紀末～8世紀）
 - 1-2-3 平安時代（9～12世紀）
 - 1-2-4 鎌倉時代（13～14世紀初頭）
 - 1-2-5 戦国時代（14～16世紀）
 - 1-2-6 江戸時代（17～19世紀）
 - 1-2-7 明治時代以降（19世紀中期以降）
 - 1-2-8 昭和20年代～昭和50年代
 - 1-2-9 昭和60年代～平成
- 1-3 ヨーロッパの化粧の歴史
 - 1-3-1 古代エジプト
 - 1-3-2 古代ギリシア・ローマ
 - 1-3-3 中世
 - 1-3-4 16～17世紀
 - 1-3-5 18世紀
 - 1-3-6 19～20世紀
- 1-4 多種多様な“美”
- 1-5 まとめ

第2章 トレンディドラマから見る“美”の変化

- 2-1 トレンディドラマとは
- 2-2 トレンディドラマにおける主要キャストからみる“美”の変遷

第3章 美容整形

- 3-1 美容整形の起源
- 3-2 美容整形が必要とされる理由
- 3-3 美容整形のニーズの変化
- 3-4 美容整形におけるランキング
 - 3-4-1 国別ランキング（2009年）
 - 3-4-2 美容整形治療ランキング（2013年1月）
 - 3-4-3 美容整形でなりたい顔ランキング（2012年）

3-5 まとめ

第4章 男女の“美”に対する意識差

はじめに

“美”というものは昔からだれもが気になっているものであり、だれもが追求しているものである。私もその中の一人であるのは言うまでもない。しかし、“美”というものは、時代が変わると共に、“美”の認識も絶えず変化し、また地域、場所によっても非常に異なるものである。例を挙げると、昔「世界三大美女」というものがいた。この世界三大美女とは、日本では「クレオパトラ、楊貴妃、小野小町」と言われている。しかし、世界での最も広まっているものは、「クレオパトラ、楊貴妃、ヘレネ」という三大美女であり、いつしか日本人が勝手に小野小町を押し込んだのだと言われている。それぞれの姿を下記の表にまとめてみた。

●クレオパトラ

世界三大美人の中でも、代表格がクレオパトラである。カエサルやアントニウス等、時の権力者を魅了し、コブラに胸を噛ませて最後を遂げたという、絶世の美女にふさわしい生涯が語り継がれている。映画でもヴィヴィアン・リーやエリザベス・テイラーなど、その時を代表する美人女優がクレオパトラを演じている。しかし、実はクレオパトラはそれほど美人じゃなかったという説がある。2000年前、クレオパトラが亡くなってすぐの古代ローマの銀貨にクレオパトラの横顔が刻まれているが、それが美人ではなかったとする証拠となっているようである。

画像 1 クレオパトラ 7 世頭部



出典：Wikipedia

●楊貴妃

ライチを好んで食し、音楽や舞踊に恵まれた絶世の美女と言われる楊貴妃だが、当時の美女の条件からすると豊満な女性だったのではないかとされている。歴史書によると楊貴妃の身長と体重について、身長 164cm 体重 69kg、あるいは、身長 155cm 体重 60kg であったとのことである。そうだとすると、肥満である。

画像 2 楊貴妃画



出典：Wikipedia

●ヘレネ

ヘレネは成長すると、地上で最も美しい絶世の美女となり、ヘレネの結婚に際しては、求婚者がギリシア中から集まった。ヘレネの義父は、彼らの中の誰を結婚相手に選んでも、それ以外の男たちの恨みを買う恐れがあるため、あらかじめ「誰が選ばれるにしても、その男が困難な状況に陥った場合には、全員がその男を助ける」という約束をさせ、結婚相手を選んだ。

画像3 ヘレネとパリス

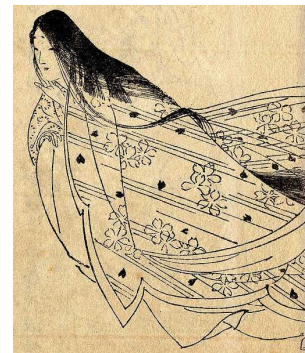


出典：Wikipedia

●小野小町

若い頃の小野小町は多くの男性に言い寄られたが、熱心だったのが深草少将であり、小町も断り切れなくなり、「私の所へ百夜（ももよ）通って来たら言うことを聞きましょう。」と答えた。99 日間せつせと通い詰めた深草少将、百晩目に大雪のために死んでしまった、という歌（古今集）がある。

画像4 小野小町



出典：Wikipedia

現在の私たちが見たこの世界三大美女は、美しいとはとても言いがたい。特に、楊貴妃にいたっては、肥満体型となっており現在の私たちの“美”の認識からは程遠い。

このように、時代、場所によって異なる“美”について、私は非常に興味を持ったので、今回このテーマをもとに卒業論文を作成することとした。

第1章では、時代や地域、場所によって異なる“美”、そして“美”を構成するうえで欠かせない「化粧」について追っていき、どのように変化しているのかを考察していく。

第2章では、その年代のトレンドドラマをもとに、“美”というものの認識は、どのように移り変わっていったのかを考察していく。

第3章では、今日、世界中で広まっている「美容整形」について論じていく。

第4章では、さまざまな“美”を見てきた中で、どうして“美”というものは作られているのか、そして何をもとに“美”というものを作っているのか、という“美”に対する意識を考察していく。

第1章 時代・世界による“美”の変遷

1-1 時代による“美”の変遷

まずは、時代によってどのように人々の“美”の認識が変化していったのか、平安時代から現在に至るまでをおおまかに追っていく。

平安時代は、きめの細かい色白の肌、小太りで、顔形はしもぶくれ気味の丸顔であご先は丸く、細い目が尊ばれた。頭髪は長くしかも水分の多いしなやかな髪の毛が美人の条件とされているが、これは成熟した女性の証でもあった。

江戸時代以来、日本では色白できめ細かい肌、細面、小ぶりな口、富士額、涼しい目元、鼻筋が通り、豊かな黒髪が美人の条件とされた。こうした美意識は、明治時代から大正時代に至るまで日本の美人像の基調となった。井原西鶴の作品には、低い鼻を高くしてほしいと神社で無理な願いごとをするとの記述があり、当時は、鼻の高さを好んだ傾向が伺える。

明治40年アメリカの新聞社が、アメリカ・カナダ・スペイン・スウェーデン・イギリス・日本の6カ国でミス・ワールドコンテストを企画した。そこでコンテストの予選として日本で初めての全国美人写真コンクールがおこなわれた。1位には、九州・小倉市長・末弘直方の令嬢で学習院中等科3年生の末弘ヒロ子（数え年16歳、1892-1942）が選ばれた。日本第1位の彼女は世界では第6位として入選した。

大正時代には、大正三美人といわれる大正を代表する3人が存在した。九条武子、柳原白蓮、江木欣々の3人である。

画像 1-1 末弘ヒロ子



出典：Wikipedia

画像 1-2 九条武子



出典：Wikipedia

画像 1-3 柳原白蓮



出典：Wikipedia

画像 1-4 江木欣々



出典：Wikipedia

関東大震災後から、パーマネントや断髪、口紅を唇全体に塗るなど、欧米の影響を受けて従来の美意識と相容れないような美容が広まった。戦後の日本では、西洋の影響を受けて、白人に近い顔立ちが美人とされた。また、健康的と考えられた小麦色の肌が美しいと思われ、一部で日焼けが流行するなどした。

20 世紀には映画・テレビをはじめとする動画が一般化日常化するなかで、静止画的な美しさだけでなく、動的な美しさも評価されるようになった。美人の基準も多様化しているため、美人の代名詞と言えるような女性はいなくなった。上記の美人像とはかなり異なる顔立ちの女性であっても、美しいと見なされることもある。

2007 年に行われたミス・ユニバース世界大会において、日本代表の森理世が優勝した。日本人の優勝は 1959 年以来 48 年ぶりの快挙であった。

画像 1-5 森理世



出典；森理世公式サイト

1-2 日本の化粧の歴史

つぎに“美”を語る上では、切っても切り離すことのできない「化粧」。現代でも、“美”をつくるには必要不可欠である「化粧」は、時代ごとにどのような変化があったのかを追っていく。

1-2-1 古代(古墳時代：3～7 世紀)

縄文時代の土偶や弥生時代の埴輪の顔面に赤い顔料が塗られていることから、顔に赤土を塗ることが当時の風習であり、日本の化粧の始まりで、魔除けのために顔に紅殻(ベンガラ：酸化鉄)を塗る“赤化粧”が行われ、赤は悪魔の進入を防ぐ色とされていた。

画像 1-6 巫女の埴輪



出典：ポーラ文化研究所

1-2-2 飛鳥・奈良時代(6 世紀末～8 世紀)

6 世紀初頭に始まった遣隋使、遣唐使や中国や朝鮮からの渡来人などにより文字を筆頭に種々の文化、文物の伝来と共に、身だしなみ、化粧品、化粧法なども伝えられ、魔除けから日本の伝統化粧の始まりとなった。伝来したけししょうは“化粧・仮粧”と書き“けわい・けそう・おつくり”などといい、化粧・髪型・服装・態度などを含めた身だしなみ、と云う広い意味に使われていた。この時代の美的感覚は正倉院の“鳥下立女屏風”や薬師寺の“吉祥天女蔵”に見られるように当時の先進国、中国での流行を意識したものが主流で、唇を濃い赤で染めあげ額と口元には鮮緑色の花鈿(かでん)、靨鈿(ようでん)を付ける様式が宮廷を中心にして流行した。その後の変化は高松塚古墳の壁画に描かれた美人画のように本来の眉毛を抜いて細長く眉墨で描いた眉が当時の流行を表している。お歯黒は、聖徳太

子がしていたと云われており、虫歯予防に行われていた。753年に渡日した鑑真和尚が、鉄漿水(かねみづ：酢酸第一鉄：液体)の代わりに緑バン(硫酸第一鉄：粉末)を使う方法を伝え、悪臭がなく、付きもよいものだったが高価であったので、あまり普及しなかった。また、騰脂(えんじ：紅花のこ)も渡来し、明治初期までの基礎的な化粧品が揃った。

画像 1-7 鳥毛立女屏風



出典：奈良 NPO センター

1-2-3 平安時代(9～12 世紀)

遣唐使の廃止と前後して中国の真似ではなく衣冠束帯や十二単といった日本独自の習慣や風習が芽生えた。源氏物語絵巻に描かれているように長髪をそのまま下ろし白く白粉を塗った顔に、眉毛を全部抜いて眉墨で描いた眉(引き方は男女、年齢、身分、階級によって描き方が多数あった)と、下唇だけに少し紅を差す化粧と変化し、鳳仙花を使って“爪紅(マニキュア)”もするようになった。髪が長いので手入れが大変で、米のとぎ汁で丹念にブラッシング、洗髪は年に1回、臭い対策として香枕を使い白檀などの香りを髪にしみこませた。これらが香りの文化も生み

画像 1-8 源氏物語絵巻



出典：ポーラ文化研究所

出し、男も女性と同じような化粧をするようになり、お歯黒文化も復活している。平安時代後期となると、武士団が台頭するが、宮廷文化に憧れ、白塗りの顔に置き眉、口紅を塗りお歯黒もするといった貴族の習慣を取り入れた平家が繁栄した時期になる。その頃、流行した白拍子達によって化粧が広められた。

1-2-4 鎌倉時代(13～14 世紀初頭)

源氏は、平家に対する反動からか質実剛健を旨とし、平安貴族風の化粧は女性だけのものに戻った。また、赤化粧が復活して、地肌の色を強調しあまり白粉を塗らない化粧法へと変化するが、眉化粧が貴族中心から一般的な化粧法となり、新しい化粧法のほお紅の使用が始まった。

1-2-5 戦国時代(14～16 世紀)

女性の化粧はあまり変化せずに、戦に臨む武士達が化粧をする風潮が生まれ、敵に首を取られても醜くないように、眉墨を引き、白粉を塗った。中には口紅やお歯黒をつける者もいたといわれている。また、“バサラ”と呼ばれ、若い男が派手な着物を身にまとい、時には傍若無人な行動を取ったり、奇抜な化粧をしたりすることが流行した。戦国時代の後半となると眉墨で描いた眉から自分の眉に戻り、白粉に紅色を混ぜた“小西白粉(紅色白粉)”

が作られ、ここに白一辺倒でない白粉が生まれた。

1-2-6 江戸時代(17～19 世紀)

最も古い女性の教養書の一つである『女鏡秘伝書(1650 年)』によると、江戸初期の化粧の仕方、特に白粉の塗り方について“おしろいをぬりて、そのおしろい、すこしものこり侍れは、見くるしきものなり、よくよくのごひとりてよし”と薄化粧をすすめている。また、『女重宝記(1692 年)』でも“紅などもうすうすとあるべし”と書かれており、濃くぬるのは卑しいこととさとしている。江戸の中盤以降になると町人文化の繁栄が化粧をする層の裾野を広げ発達させるが、その流行を主導していたのが歌舞伎役者や遊女達であった。延宝(1673～1681 年)ころの歌舞伎俳優上村吉弥は、吉弥結びという帯結びや吉弥帽子、吉弥笠などの流行を生んだ。引退後に京都四条通りに白粉店を開き、吉弥白粉を発売して大いに繁盛した。その他、中村数馬や二代目瀬川菊之丞など数多くの俳優が新しい化粧法や化粧品の開発・宣伝に大きな役割をはたした。化粧に関しての総合的な知識をまとめた、『女子愛敬都風俗化粧傳(みやこふうぞくけわいでん：1813 年)』があり、その後、大正時代に廃刊になるまでのロングセラーとなって日本の伝統的化粧の指導書の役割を担った。実際に化粧を視覚的に伝えたのは浮世絵版画であり、実際に伝えたのは、幕末の江戸市中 1400 余人いたという女髪結達であった。しかし当時流行の化粧はいわゆる白塗りであって、それが日本の伝統化粧であったとは云えないようで江戸末期の『守貞漫稿(1853 年)』によると、一般に京都・大坂の化粧は濃く、江戸は薄く、素顔も多かった。中でも京都の官女は濃く、遊女・芸者なども上方は濃い江戸は薄化粧か素顔もあった。一般の庶民は普段は素顔で、晴れの日には薄化粧をした程度だったようで、薄化粧もしくは素顔でいられたのは、ぬか袋や生薬類を使った肌の手入れ法が普及していたからだと云われている。その化粧法も、薄青色を混ぜた白粉を鼻すじの両側や上瞼に塗ってシャドーを作って鼻を高く見せたり、また、当時の紅花は最高級の口紅用材料として珍重されて、非常に高価にも関わらず、紅を濃く塗って黒に近い暗緑赤色にする“笹紅”が流行したり、下唇に墨を塗った後に紅を塗って、笹紅と同じ効果出す化粧法も考え出されたりした。また、ペディキュアなども行われていた。白粉はまだ鉛や水銀製だったのだが、反復使用するうちに慢性毒が体内に蓄積され一種の職業病(鉛中毒、水銀中毒)として幾多の悲劇が生まれている。日本固有の化粧として伝えられてきたお歯黒は古代から男女ともに成年式などの通過儀礼として行われてきたが、結婚と同時に歯を染めるようになり、また出産と同時に眉を剃るようになり既婚者の証とする風習も生まれた。

画像 1-9 時代かがみ



出典：ポーラ文化研究所

1-2-7 明治時代以降(19 世紀中期以降)

1870 年のお歯黒は旧習であるとして、禁止令の太政官布告を契機として、次第に白歯が増えて、お歯黒をする者は減ったが、明治初期に即席のお歯黒ができるようになり再び増えた。しかし日露戦争の大勝以後、女性風俗も近代化の途をたどり、お歯黒人口も再び減少した。同時に無鉛白粉の開発と舶来化粧品品の輸入増、それに新聞・雑誌などによる広告・宣伝の活発化によって、化粧は一般化し、化粧品産業も基礎が固まった。大正時代には化粧水・化粧液・乳液などの基礎化粧品を始め、香水・石鹸・歯磨など洋風化粧品がその種類を増し、大衆化した。昭和に入るとクリームやルージュが種類をまし、更に第二次世界大戦後は、メーキャップファウンデーション・アイメーキャップ類・フレグランス(芳香製品)類・男性化粧品と、化粧品も化粧法もまったく世界共通のものとなった。

画像 1-10 美人絵葉書



出典：ポーク文化研究所

1-2-8 昭和 20 年代～昭和 50 年代

高度経済成長期の日本、人々の生活が便利に豊かになっていった時代であった。百貨店で化粧品や洋服の買い物を楽しんだり、おしゃれに時間とお金をかける余裕がでてきたりした昭和 30 年代は、「化粧はピンクに」「化粧は少々ピンクの肌色にして」「ここ 2、3 年ピンク調で白めのファンデが主流・・・」とあり、ピンク系ベースメイクが主流であった。この流行は昭和 30 年代の終り頃まで続いた。そして、昭和 50 年代以降、よりナチュラルな肌色を求める傾向へと繋がっていった。一方ポイントメイクでは、それまでのリップメイクにプラスして、アイメイクが重視されるようになっていった。まつ毛を長く見せる化粧品としては、マスカラは戦前に、つけまつ毛は昭和 20 年代には既に登場していた。ただ、当時のつけまつ毛はより美しく見せるメイクとしてではなく、まつ毛が短い、少ないといった人に修正メイクとして使うことが薦められていた。それが、昭和 30 年代に入るとおしゃれとして使うことが少しずつ浸透しはじめ、さらに昭和 42 年に、イギリスの女優ツイッギーの来日で、彼女のメイクを真似たアイライン、アイシャドー、マスカラにつけまつ毛とアイメイク化粧品をフル活用して目もとを強調するメイクが一挙に大流行し

画像 1-11 ツウィッギー



出典：毎日 JP

た。それは昭和 45 年、これまでにないファッション誌として創刊された『anan』でも、長いまつ毛とアイメイクで目を強調したファッションモデルが登場した。その後しばらく続いたつけまつ毛ブームも昭和 50 年代のナチュラルな目元への流れとともに終息していった。

画像 1-12 anan 創刊号



出典：ポーラ文化研究所

1-2-9 昭和 60 年代～平成

昭和 50 年代後半から 60 年代、いかに素肌っぽい質感に見せるかがポイントになっていった。当時の女性誌を見ると「もしかして素顔！？と思わせるような薄化粧はメイクの理想」「ベース作りに重点を置いた素肌美メイク」といったタイトルで特集を組み、素肌っぽい仕上げのテクニックをこぞって記載していた。一方ポイントメイクでは、それまでと大きく変化しているのが眉メイクであった。昭和 40 年代後半から昭和 50 年代前半にかけてアーチ型で細めの眉が定番だったが、昭和 50 年代後半から 60 年代には自然な太眉へと変化していった。そしてナチュラルな肌、眉に合わせ、リップやアイメイクも変わっていった。リップは落ち着いたベージュ系が注目され、目からはつけまつ毛が取れマスカラのみになった。アイシャドーも肌色になじむブラウン系が主役になった。ブラウン系の濃淡で自然な立体感

画像 1-13 ビューティ専科



出典：ポーラ文化研究所

画像 1-14 Coffret



出典：ポーラ文化研究所

を出し、当時流行していたピンクやパープルといった色物は、華やかさをプラスしたり、グレー系のアイシャドーと合わせ、知的感や大人っぽさの演出に使われていたりした。

平成に入っても女性誌には「好感度 No.1 はやっぱり薄化粧風」「色をおさえたナチュラルメイク全盛の今」といったコピーが並び、ベースメイクはなお、素肌っぽいナチュラル志向が続いていた。一方ポイントメイクは、眉メイクはそれまでの直線的な眉から、再び眉山をとり眉尻にかけて細くなる山型に変化した。アイシャドーは光やパール感を感じるものも流行し、リップははっきりして落ち着いた色味が再び登場した。こうしたポイントメイクの変化は小顔がキーワードになっていた。女性誌の特集を見ても「日本人顔を小さく見せる 30 の方法」「顔を小さくすっきりみせる

ヘア&メイク」といったメイク特集を組み、さまざまなテクニックを紹介した。目と口の印象を強めて顔を小さく見せるため、下まつ毛の内側に白いラインを入れて白目を大きく見せる、目の周りにハイライトを入れる、濃い目のリップをくっきりと付けるなどのメイクが流行。眉、目、唇のどこを強調するか、バランスをとりながら小顔を演出していた。

一方、こうした大きなメイクトレンドとは別に 10 代から 20 代前半の一部の女性に特有のファッションやメイクが登場したのもこの時代である。昭和 40～50 年代には、細い眉に目元を強調したメイク、小麦色の肌とホットパンツや編み上げサンダル、またサーファースタイルといったギャル系の元祖的ファッションやメイクの流行。雑誌「anan」「non-no」から生まれたファッションやメイクが若い女性の最先端となった。平成に入るとトレンドを生み出すのは女子高生に移行した。そこでミニスカートのルーズソックス、厚底靴といったファッションのコギャルが登場。茶髪に日焼けした肌、メイクは極細眉に目元を強調したアイメイク、白っぽいピンクのリップが特徴である。また、極端に肌を焼いたガングロに白い髪、隈取のようなアイメイクに真っ白なリップメイクのヤマンバギャルが登場したのもこの頃であった。その後、小麦色の肌に細い眉の安室奈美恵メイクを経て、目元を強調した歌手の浜崎あゆみメイク、そして肌の色

画像 1-15 げーはーこ
(ヤマンバギャル)



出典：読モニュースサイト

は小麦色から美白ブームの白い肌へと移り変わっていった。さらに、近年では雑誌「CamCan」モデルのえびちゃん、もえちゃん、関西のお嬢様スタイルによくみられたロングの巻き毛ブーム、そこから茶髪の巻き毛をアップスタイルに結び、高く重ねた盛りヘアとアイラインやつけまつ毛でとにかく目を強調したメイクが特徴のアゲ嬢スタイルやメイクが特徴的な流行となっている。

1-3 ヨーロッパの化粧の歴史

つぎに日本だけではなく、ヨーロッパにも目を向けてみる。化粧の起源は、現代の人類に近い骨格を持っていると言われているクロマニヨン人のいたおよそ 4～5 万年前までにさかのぼると言われ、長い歴史を持っている。この時代は遺品から生活道具や武器が発見され、歴史上初めて動物やその他の家畜・生活様式を壁画に残したといわれている。また、一説には約 20 万年前のネアンデルタール人の時代までさかのぼるとも言われている。この時代の化粧とは、狩猟の儀式の際に体にペインティングしたものという説があり、赤の粘土・赤い顔料を体に塗ったものを言う。また、紀元前 3000 年ごろの遺跡で化粧瓶・化粧パレット・手鏡・コール壺が発見された。これが、はっきりとした化粧行為の確認といえる。

1-3-1 古代エジプト

西洋の化粧文化流れの出発点とされている。この頃には樹脂や練り香水が作り出され、エジプト人は香りのよい水で水浴するという習慣もあった。また、特徴としては目を強調するためのアイメイクがよく見られたようである。当時の女性は今でいうアイライン・アイシャドーみたいなもので目の周りを真っ黒に塗っていた。この化粧は目をパッチリ大きく見せるために目を縁取っていたのかもしれない。しかし、これには他の意味があったと言われている。それは太陽の光を和らげるためや信仰のための二つである。今では美しさのためにとする化粧だが、化粧の始まりは宗教に関連していたようである。

画像 1-16 古代エジプト画



出典：Floral Musee

1-3-2 古代ギリシア・ローマ

化粧はエジプトのものが伝わったと言われている。ローマでは色白が美しさの基準であったため入浴が盛んに行われていた。現代で言うパックのようなものも盛んに行われ、鉛白や白亜（チョーク）などが使われていた。また、スプレニアも流行した。この時代の付けぼくろはオシャレが目的と言うよりは、吹き出物などを隠す役割を果たしていた。そして、贅沢を好むローマ人は香料を大量に使用していたようである。特に貴族たちは髪に付ける香油を浴室に持ち込み、一日に三度もすりこんでいた。

1-3-3 中世

中世の時代は、キリスト教の影響で化粧はあまり進歩せず、むしろ回教（イスラム教）の世界で大きく進歩した。（ここでは、ヨーロッパを取り扱っているため、割愛させていただく）

1-3-4 16～17世紀

ルネサンス期を迎えるころ、イタリア・スペインを中心に香水が流行した。これは、入浴して体を清潔に保つといった心遣いがなくなり、衛生に気を配るよりも香水のにおいでごまかすことをしていたということである。その後、香水は欧州全域にも拡大しました。香水は官能を刺激するものとしてだけではなく、いろいろな伝染病（特にペスト）に対して有効な予防薬として考えられていた。また、この時代にもつけぼくろ（パッチ）が流行した。これは古代ギリシア・ローマ時代のものとも異なり、肌の白さを引き立たせるためのものであった。素材もベルベットやサテンでつくられており、この流行は次の世紀まで

続いた。

1-3-5 18 世紀

この頃から化粧の様子が少しずつ変化していった。具体的には頬の上に紅を丸く塗ったり、唇いっぱい紅を塗ったりなどである。これはルイ 14 世の愛妾モンテスパン夫人の影響があるといい、彼女が出入りする以前の宮廷では紅はあまり使われていなかったようである。また、市民階級は地味な色、上流階級の貴婦人たちは鮮やかな色など紅の色合いで女性の階級などを区別していた。化粧品はすべて匂いが強かったが香水を使うことも流行し、匂いが強ければ強いほど珍重された。さらに、エチケットとして毎日香水を変えることも要求され、この香水の流行が貴族階級から市民階級へと広まった。この時代も 16～17 世紀同様に肌の白さは重要視され、引き立たせるために皮膚の上にうすく青色で 1～2 本の血管を書いたりもした。

画像 1-17 貴婦人画

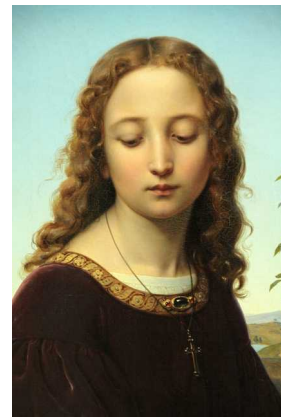


出典：ameba

1-3-6 19～20 世紀

時代とともに濃厚な化粧はすたれ、控えめな化粧や香り、そして再び白い肌が好まれるようになった。第一次世界大戦後は日焼けした小麦色の肌が健康美としてもはやされたが、1930 年ごろまでにはまた日焼けを嫌う傾向へと変化していった。そして、1955 年ごろにファンデーションが発売され、世界共通の化粧方法が生まれはじめた。その後、各国の化粧品メーカーが科学技術品としての化粧品に腕を競うようになり現在に至った。

画像 1-18 若い女性の肖像



出典：ヨーロッパ芸術街道

1-4 化粧に関する引用資料

化粧に関して調べていく内に、興味深い記述があったので、引用させていただく。

1-4-1 引用資料 1

電車の中で化粧をする少女の姿は、東京ではもはや日常風景となっている。彼女らの視界には、そこに人は存在していない。人を魅せる化粧には、工程は見せないという約束事があったのだが、彼女達は化粧の醸し出す秘め事のイメージを打ち砕き、不精なオバサンよろしくシルバーシートに鎮座していた。

ルール違反として断罪される彼女たちだが、少し知恵がある少女なら反論するだろう。映画の中だって、女優が化粧をするシーンがあるじゃないかと。しかも、「魅力的」といった評判まである。しかしその後には、女優の嘲りが返ってくる。「私はあのシーンを魅せているの」と。化粧をする姿が見苦しいわけではない。日本画はもとより、「化粧する女」は芸術の一つのテーマだ。舞妓の化粧姿を撮る写真家は、髪を結い上げ、丁寧に塗ったおしろいの顔に、緊張した面持ちで最後の仕上げに紅をひく、その一瞬にシャッターを合わせるだろう。そこには秘匿の美しさを覗き見る魅惑と緊迫感がある。舞妓もまた魅せているのであり、無防備に見せているのではない。おしろい半ばの顔は、決して撮らせない。

大人の一方的な少女たちへの断罪は、さらに加わる。「なに、その厚化粧」というのだ。不細工な女を表現するときは、厚化粧をさせるのが手っ取り早い。厚化粧というだけで、充分その効果を発揮する。再び知恵ある少女は反論するだろう。「舞妓さんの化粧は濃いじゃないか」と。そのとおりだ。しかも舞妓は少女より若いかもしれない。「若いうちは素顔で充分きれいなよ」などとオバサンは言うが、少女は納得できない。それは、そもそも少女とオバサンで化粧に求めているものが違うからだ。

オバサンたちが絶対に理解できないのがガングロ化粧だ。ちっともきれいじゃなく、第一あそこまで描いてしまうと、どの子だかわからない。しかしながら、ガングロと舞妓の化粧には大きな共通点がある。

舞妓には、化粧から仕種、衣装、髪型まで詳細な決まり事がある。髪は丸く愛らしい「割れしのぶ」に結い、化粧は顔から首、襟足の一面に鬢付け油を伸ばしたうえに練りおしろいを刷毛でたっぷり塗り、白塗りが終わると目元に紅をさし、眉も赤で描く。口紅は下唇だけにおちょぼ口に少しだけ塗り、「おぼこく」仕上げる。赤い長襦袢に赤に金糸の刺繍が入った衿、振袖には肩上げがあり、だらりの帯をしめて、「おぼこ」という丸い高下駄を履く。お座敷では常に控えめに振舞い、旦那衆との話を盛り上げるのは芸妓になったお姉さんの仕事で、舞妓ははにかみ、微笑み、幼子の頼りなさを漂わせて、本当の幼子にはあるまじき酒宴の席に彩りを添える。全てが旦那衆の心地よさのために、長い歴史をかけて創り上げてきた虚構の世界であり、舞妓はそこに配置されるひとつの役所なのだ。

完成された雅の世界で、舞妓はあくまでも舞妓として振舞う。化粧はキャンバスに描くがごとく、素の顔に舞妓の顔を描く。舞妓に仕上がったときには、素がだれであったかは問題にならない。ここに化粧の持つ仮面性がある。雅な世界とガングロを同列にしてはお叱りもあるだろうが、ガングロも同様にガングロを描く。舞妓にとって化粧は非日常世界への支度であり、ガングロ娘も日常からのささやかな脱出を求めて顔を塗る。ガングロ娘が目指すのは美しく装うことではない。「化ける」ことが目的なのだ。化けること、それは別

の人間、別の存在に変身することであり、化粧の原点である。

遡ること 7 万年、旧石器時代の人骨には目や口の周辺に染料の痕跡が見つっている。日本では古墳時代の埴輪などから、顔全体に朱を塗る風習があったとされている。朱には魔除けの霊力があると信じられた。卑弥呼が神と交信していた時代には、目を隈取することで邪気の侵入を防ぎ、神の言葉を話す巫女の口は火の色に染められていた。化粧をするものは神の代弁者であり、特別の存在だった。

時代を下り平安になると、富を集め、広い寝殿造りに暮らすこととなった貴族たちに中国から白粉（おしろい）がもたらされ、労働から離れて薄暗い奥座敷で過ごす彼等の顔を白化粧が引き立てた。この頃には呪術的な色彩は薄れてくるが、恋に身をやつす貴族は、丁寧に眉を抜き、高価な白粉を惜しみなく塗り、額に人にはあらぬ形の眉を描いた。この頃には、魅惑という大きな目的が化粧に付け加わるが、異様な厚化粧は特権階級の象徴であり続けた。

さらに時代が下ると、町人が経済力を有してくる。豊かな上方商人の妻や娘は、成り上がりの常よろしく貴族を真似て化粧に手を染めた。もちろん高価な白粉をたっぷり塗り、黒光りするほど濃く紅をひいた。

薄化粧が登場するのは江戸以降である。交通の要に位置した江戸は、開幕後経済の中心地としても栄え、町人文化も花咲くが、上方商人ほどの財を手に入れるのは江戸も後期を待つこととなる。活気とそこそこの経済力を持った江戸っ子は、白粉を慎重に伸ばし、大事に紅をつけた。着物も金糸銀糸などは高嶺の花、地味なものを身に着けた。しかしそれだけでは將軍様のお膝元というプライドが許さない。そこで江戸っ子のやせ我慢は「粹」という文化を編み出していく。

こうして化粧が大衆化してくると、経済的事情から薄化粧となり、薄化粧には素地が残るところから、素をきれいに粧うための化粧が生まれていった。江戸の女は肌に気を遣ったのだ。

さて、男性諸氏が恋人や妻に日頃求めるのは、「粧う」化粧でこそあれ、「化ける」それではないだろう。女は、化粧をせずにはやっていられないときに、鎧さながらの化粧を施す。薄化粧が恋心なら、厚化粧はいわば戦闘服だ。「化ける」と「粧う」を間違えた女がパロディなのは言うまでもない。傍らに座る女のファンデーションの厚みの中に、女の本当の心が隠されているかもしれない。

1-4-2 引用資料 2

化粧は女のするもの、と私たち教わってきた。しかしその常識は、歴史的には嘘である。明治政府が国民国家の精神的支柱として崇めた明治天皇は、断髪に髭の軍服姿で閱兵式に臨む凛々しい姿が強調されてきたが、それ以前は化粧の似合う少年だったようだ。維新直後に天皇に謁見した西欧人は、顔を真っ白に塗った女のような天皇の姿を書き記している。宮廷の化粧法だ。徳川によって権力から遠ざけられた 300 年間も、公家たちは化粧の習慣

を維持していた。天皇もしかりである。しかし明治政府には、天皇と化粧という事実を抹殺しなければならない事情があったのである。

男の化粧は平安貴族に始まり、連綿と続いてきた。質実剛健を美德とした武士も、最初から野暮だったわけではない。平氏の武士は化粧をしていたらしく、源平入り乱れて戦った戦乱期には、平氏の落ち武者は化粧をしているからすぐ分かったというエピソードが残っている。敗走という生死の際に、白塗りの武者というのはいかにも軟弱そうで、泥臭い関東武士を中心とした源氏は平氏の姿を嘲ったものだが、源氏が負けた時には日焼けした顔を百姓侍と馬鹿にされていたのである。

実は、戦というのは見栄えが非常に大切なのだ。武勇には、カッコよさが求められる。血まみれで転がり悶える負のイメージだけでは、だれも志願などしない。戦とは、勲なし名を馳せる檜舞台である。腕が立とうとみすばらしくては、覇者の名誉を獲得できない。戦争にはこういうトリックがある。

実際、源氏平氏に関わらず、戦場に赴く武士たちはとてもお洒落だったようだ。馬具から武具、鎧兜はできる限りに最高のものを設え、そのグッズも自慢の種で、手入れを怠るはずもなかった。戦法が一騎打ちから集団戦に変化するにつれ、動員された足軽などは衣装といえないほどになっていたが、武将は見た目にも威厳を保った。そして、いざ決戦という日、老いた武将は鏡に向かった。万一この首が敵の武将に渡った時、なんだこんな老人が大将かと思われたのでは当方の戦意にも影響し、親方様にも申し訳ないと、かつらをかぶり、若作りの化粧を施した。死化粧である。化粧にはこんな使い方もあったのだ。

お歯黒もまた、女だけのものではなかった。平安貴族はもとより、武士も鉄槩（かね）で歯を染めていた。武士の場合は主君に仕えたときに染めたらしく、歯が黒ければ主君がいる証拠で、二君にまみえずという意味表明だったようだ。実際にはお歯黒の武士も、口をすすいで主君を渡り歩くこともなかったわけではないようだが。

このように公家も武士も、自らのステイタスを表す道具として化粧を活用してきた。しかし、徳川時代になると男の化粧は廃れていく。そこには関東武士を基盤とした経済事情や精神文化もあっただろうが、それ以上に、戦のない、戦の禁じられた武家社会に男の化粧は馴染まなかったのだろう。時代は雅よりも質素を、武勇よりも秩序を、男の美德として押し付けていく。武士は大人しい武家となり、活力も町人に及ばなくなっていく。江戸期の300年は、町人文化が武家文化を半ばなし崩しにしたことで救われたのかもしれない。町奴は化粧をしていた証拠こそないが、市中には伊達者たちが溢れ、三味を爪弾き、幕府を茶化してもいたのである。

さて、日本で最終的に男から化粧を奪ったのは、西欧化だった。富国強兵、国民軍の創設の中で、男たちは三々五々に歩くことも許されず、行進の仕方を叩き込まれていく。可憐な明治天皇も偉勲ある姿へとファッションを転換させる。男が化粧などもつてのほかとされ、派手な着流し姿の「はぐれ雲」は東京から放逐された。偶然かどうかは知らないが、男色が人にあるまじき行為として全面否定されるのもこの頃である。

では、一足先に近代化を走った西欧はどうだったのか。17 世紀のフランスでは宮廷を中心に男たちは華麗な衣装を身に纏っていた。太陽王と呼ばれたルイ 14 世は、かつらをかぶり、フリルを多用した色鮮やかな上衣に豪華なキュロットを身につけている。彼の治世はヴェルサイユの宮廷文化が最も華やいた時代であり、慎重 160 センチ足らずという小柄な王が好んでハイヒールを履いたことから、宮廷の女たちにもハイヒールが流行していったと言われている。おそらく化粧や香水にも凝っていただろう。また、王はプロの男性ダンサーに舞台衣装を着けてダンスを踊らせ、時には自らも一緒になって踊った。華美であり優雅であることが、この時代のステイタスであったのだ。

しかし、男のお洒落が絶頂に達した時、終焉の序曲も始まっていた。やがて、売春を生活の糧とするパリの洗濯女や、マイスターの道も閉ざされた徒弟男は、手に手に銃を取り、バスチーユを、ヴェルサイユを襲撃し、ルイ王朝は崩壊する。百年の闘争を経て市民社会が定着したとき、男のファッションはどれも同じようなカラススタイルとなっていた。というのも、華美な姿は権力者の象徴であり、民衆を不当に収奪した結果ととらえられたのだ。民主主義こそが絶対真理とされる社会では、労働こそが尊敬され、多忙であることが美德とされる。革命期を生き延びてブルジョアジーに転身を遂げた貴族も、富はあくまでも自らの労働と才能の産物であるという顔を装わなければならなかった。労働の妨げとなるフリルは断念し、一見、そのへんの中産階級と変わらない、ただ服地が高価なだけの背広で身を隠した。自らダンスに興じることもなくなり、歌舞音曲はコンサートホールで楽しむばかり。お洒落の快楽を女に譲り、男はめかした女を連れて歩くことで間接的にステイタスを主張した。そのことが女性への敬意を高めたのか、所有欲を増長したのかは知らないが、見るからに訓化された男性の姿がポピュラーになったようだ。

こうしてハイクラスファッションが抑制される一方で、みすぼらしかったただの下層には、ささやかながらお洒落を楽しむ余裕が生まれる。大量生産が安価な衣服を供給し、カラフルなシャツを着ることも、いいかげんな服装でいる気楽さも覚えていった。ただし、針の穴から秩序の階段を目指す上昇志向の男は、カラススタイルによる「誠意」の表明をよぎなくされる。自由という言葉の氾濫ほどには、男は自由にならなかった。

近代化の怒涛は、男たちから外見上の艶やかさを奪ってしまったようだ。それが単に外見だけならいいのだが、長い尾羽を切り取られたオス鳥でないことを祈るばかりである。

1-5 多種多様な“美”

いままでは、「世間一般的」な“美”を取り上げて追ってきたが、世界には顔を加工してきれいなものに創りあげるのではなく、また違った視点で“美”を認識している人たちがいる。世界にはさまざまな“美”があるが、ここでは一度は耳にしたことがあるであろう「首長族」と「耳長族」を取り上げる。タイ北部、ミャンマーとの国境近くで、「首長族」と呼ばれる人たちが住んでいる。この辺りは山岳地帯で、少数民族の村が点在している。首長族もそんな少数民族であるが、首長族というのは民族の名前でない。カレン族などの一部が、女性の首を長くしていたために、そのように呼ばれるようになったのである。彼女たちの民族衣装を見れば、民族的にはどこに属するのかはすぐ分かる。

画像 1-19 首長族



出典：Thaismile.jp

「首長族」という名称はよくないのではないかと言われたことがあったが、現地でも「Long-Neck People」と呼ばれている。首を長くするためにつけている首輪は、実は1本

画像 1-20 耳長族



出典：手のひらの中のアジア

の真鍮でできたコイル状の輪である。彼女たちは腕や足にもこの輪を巻いている。なぜ、このような首輪を巻く風習が誕生したのか、その由縁には諸説がある。例えば、虎に食べられないようにするためとか、村の外に逃げていくのを防ぐためとか、ただのお洒落だとかである。首輪はかなり重く、3～4kg くらいある。腕輪足輪もそれぞれ 2kg くらいあるので、逃亡防止説がかなり有力である。村はジャングルの中にあるし、川もあるし、この鍾りを担いで村の外に出るのは大変である。しかし、現在は逃亡を防ぐためにこの風習が続いているわけではなく、女性たちは純粋にお洒落として、好んで首輪をしている。ここでは首輪をして、首が長いほど美人なのである。首輪は5歳くらいからつ

け始め、徐々に長い首輪に変えていく。それで、年長いた女性ほど首が長くなっている。

また、首長族と村を接して、耳長族の村がある。耳たぶを大きく、長くし、その耳たぶに穴をあけ、円盤形の大きなイヤリングをはめ込んでいる部族のことである。ここでは、耳たぶに巨大な穴をあけることが美人のしるしなのである。

1-5 まとめ

この章で“美”を追ってきたところ、時代や国（地域）が変わると、“美”の認識も変化する、また“美”の認識は多種多様なものであることがわかった。自分では“美”とは思え

ないようなものでも、別の誰かにとっては“美”となり得るものが多数存在するのである。人によって時代によって“美”はさまざまなものに変化し得るものなのである。

第2章 トレンディドラマから見る“美”の変遷

2-1 トレンディドラマとは

トレンディドラマとは、都会に生きる男女の恋愛やトレンドを描いた現代ドラマ（ゆえに「トレンディ——」）のことである。配役はドラマ製作の時点で、演技や芸能活動が活発であり、美男美女、もしくは目立った個性が、視聴者に極めて好意的に受け止められている俳優や歌手、タレントが起用されることが多い。女優では浅野ゆう子、浅野温子の『W浅野』や中山美穂、山口智子、鈴木保奈美が活躍し、俳優では三上博史、柳葉敏郎、陣内孝則、石田純一、江口洋介などが特に活躍した。現在ではトレンディドラマという用語自体はほとんど死語と化し、年月の経過と共に『トレンディ』と見られる価値観そのものも大きく変化しているが、トレンディドラマ同様の特徴を持つドラマは今もなお多数製作・放映され続けている。また、トレンディドラマという言葉でドラマを呼ぶ以前にも、『ハーフポテトな俺たち』（1985年）がこの特徴を持つドラマであったとされるが、「いまを思えばトレンディドラマの先駆けだが、かなり早すぎた。」と言われている。

基本的に、バブル景気時代の女性の願望を具現化した作品群であり、恋愛主体の少女漫画の王道に準じた点もある。一時期、トレンディドラマ全盛の時期には主に男性から批判されることも多く、当時のドラマが極端にトレンディドラマへ偏っていた点は否めない。ただし、従来の多くのドラマが男性の願望主体に傾倒していた（バブル以前のメディアでは、このことは当然であったため、男性にはその自覚はない）のであり、テレビ番組に女性の視点が強く反映されるようになった過渡期に現れたため目立っただけだという意見もある。ゴールデンタイムに放送し、視聴者は最も視聴率の取れる主婦、OL層、社会人層をターゲットとした娯楽作品。当時の『F1層』（20歳～35歳であった新人類世代の女性）がターゲットで、低年齢者や高齢層はあまり対象とされていない。

2-2 トレンディドラマにおける主要キャストからみる“美”の変遷

ここでは、その時代の顔ともとれるトレンディドラマの主要キャストを見ていくことで、当時どのような“美”が主とされていたのかを見ていく。20年間という短い間で、人々の“美”に対する認識はどのように変化していったのか。

以下に主なトレンディドラマのタイトル、放送年、出演者を表にして記載し、また、ドラマ放送時の出演者の画像を見比べ、どのような変化があったのかを記述していく。

番組名	放送年	出演者
-----	-----	-----

ハーフポテトな俺たち	1985 年	中山秀征、香坂みゆき
金曜日の妻たちへ I～III	1983～1985 年	古谷一行、いしだあゆみ、石田純一
男女 7 人夏恋物語	1986 年	明石家さんま、大竹しのぶ
君の瞳をタイホする!	1988 年	陣内孝則、浅野ゆう子、柳葉敏郎
君が嘘をついた	1988 年	三上博史、麻生祐未
愛しあってるかい!	1989 年	陣内孝則、小泉今日子、柳葉敏郎
東京ラブストーリー	1991 年	鈴木保奈美、織田裕二、江口洋介
101 回目のプロポーズ	1991 年	浅野温子、武田鉄矢、江口洋介
もしも願いが叶うなら	1994 年	中山美穂、浜田雅功
ロングバケーション	1996 年	木村拓哉、山口智子
バージンロード	1997 年	和久井映美、反町隆史
魔女の条件	1999 年	松嶋奈々子、滝沢秀明
やまとなでしこ	2000 年	松嶋奈々子、堤真一
美女か野獣	2003 年	松嶋奈々子、福山雅治
花より男子	2005 年	井上真央、松本潤
プロポーズ大作戦	2007 年	山下智久、長澤まさみ

ドラマの出演者を追って見ていくと、特にヒロインの顔に 2 点変化が見られる。画像を 4 枚掲載するので、画像を見ながら比較してほしい。

画像 2-1 金曜日の妻たちへ
(1980 年代)



出典：BS-TBS

画像 2-2 東京ラブストーリー
(1990 年代前半)



出典：TI-DA

画像 2-3 ロングバケーション
(1990 年代後半)



出典：Yahoo ショッピング

画像 2-4 美女か野獣
(2000 年代)



出典：amazon

1 点目にあげられるのは、髪型である。1980 年代のドラマでは、前髪がカールしまとめられている。また、現在ではほとんど見かけなくなった 1 本の三つ編みの髪型も多く見受けられた。1990 年代のドラマでは、80 年代とは異なり、まっすぐに伸ばされた前髪で、短くカットされているのが特徴である。さらに言うと、その前髪は浮き気味である。現在では、浮いてしまう前髪は女性の最大の敵とも言える髪型である。2000 年代に入ると、いわゆる「現在風」の髪型であり、ナチュラルに分けられた前髪と軽くパーマ、もしくはカールがかかった髪型である。そして、どの年代にも言えることだが、女優はみんな長さは違えど同じような髪型をしている。まさに、“美” の認識が時代ごとに全員共通のものになっている証である。

2 点目にあげられるのは、眉である。眉は女優だけではなく、俳優にも同じような傾向がうかがえる。1980 年代、1990 年代前半ではほぼ手付かずの眉である。そのままかあるいは、元の形を変えずに整えている程度である。また、眉の濃さも変えずにいるため、顔の中でも強調されて見えている。1990 年代後半に入ると、眉が少し細くなっているように思われる。元の形から少し細くし、整えられている。2000 年代に入ると、眉は元の太さよりも、だいぶ細く整えられ、また眉の濃さも薄くなっている。そして、自分の眉で完成形をつくるのではなく、アイブロウ（眉をかくペンシル化粧品）を使用して、理想の形にしている場合が多い。元の眉はおそらく非常に細く薄く、化粧でつくりあげている人が多い。

以上の 2 点が、20 年間のトレンドドラマのキャストからうかがえる大きな“美”の変遷であった。女優ということもあり、元々整った顔立ちの人が多く、2000 年代までは、化粧はベースメイクとリップメイク（口紅）しかしていない人がほとんどであった。2000 年代に入ると、眉を加工し始め、そして多少ではあるが、アイメイクもする傾向にあった。

第 3 章 美容整形

ここでは、近年世界各国で広まっている「美容整形」について論じていく。今日、“美”を求めるあまりに、化粧の枠を飛び越えて、顔自体を変えてしまう人が増えている。以前よりも、金銭的負担が少なくなったこともあるし、また、手軽に行えるようになったことが広まった大きな理由であると思われる。

3-1 美容整形の起源

美容整形と形成外科の原点は同じところにあり、紀元前 6 世紀頃の古代インドと言われている。そこでは「スシルタ」と言う名前の医者がいた。その医者が造鼻術を実践していたと言われているようである。この技術はギリシャやローマにも伝播し、ルネサンス期の 1597

年にはイタリアのタリアコッティが形成外科の教科書を執筆している。19 世紀までには技術的な進歩を遂げ、続く 20 世紀には、2 つの世界大戦を通して、形成外科は「医療」として確立することに成功した。美容整形の歴史としては、1845 年に世界初の近代的な美容外科手術が行なわれたことが重要になる。当時、ヨーロッパにおいてユダヤ人の顔は嫌われていた。その理由としては、当時のヨーロッパの美しい顔といえば「ギリシャ・ローマ」的な顔だったからである。この人種偏見の中でユダヤ人がより良く生きるために、ここで得た戦傷を修復する技術が美容整形に応用されることになった。また、美容整形は日本にも輸入された。日本には昭和初期にヨーロッパから美容整形に関する技術が紹介されている。第二次世界大戦後、日本では昭和初期にヨーロッパから技術が紹介されたことによって、美容整形が始まった。戦後はヨーロッパやアメリカ人への憧れもあり、高い鼻、美しいスタイル、はっきりした目元を求める女性が増え、美容整形業界はシェアを広げていった。美容整形のシェアは 21 世紀になって、どんどん広がっていて、その理由は大きく分けて 3 つある。1 つ目はプチ整形、2 つ目は男性、3 つ目は高齢者である。現在ではプチ整形という簡単な美容整形の手法があるので、美容整形がより身近なものに感じられる。また、昔は美容整形を受ける人間は若い女性だけだったが、今では「男性も美しくあるべき」という考え方を持つ男性や「老後を美しく、良く生きる」という考えを持つ高齢者による美容整形も増えている。美容整形の始まった当時の考え方が美容整形の発展に大きく影響を与えているのである。

3-2 美容整形が必要とされる理由

美容整形が必要とされる理由は主に 2 つあり、昔からあった形成外科的な意味でけがの修復技術、これが進化して、より、人間として自然な姿への修復という意味で美容整形が必要とされるケースが一つである。もう一つは、現代美意識の中で「美」の範疇から外れると思い込んでいる人々が、少しでもその「美」に近づきたいと外科手術を希望するケースである。美容整形では、現代でも両方のケースが存在しますが、世間一般に認識されているのは後者の「美」の追求のケースである。単なるけがの修復でも、今は日常生活に不便だからというだけでなく、やはり、人間として美しくありたいという願望もある。特に今の世代が「美」の象徴としているのは「トップモデル」や「目鼻立ちの整ったスリムな有名女優」である。昨今は男性でも女性でも、そうした「美」に相互の価値観を置くことが多いので、最近では男性も美容整形に関心を持つ比率が急増している。美容整形を訪れる人の多くは女性であるが、上記のような傾向で、男性も増えている。「美」の範疇から外れるということは、「美」に重い価値観を置く人々にとっては重大な問題であり、自尊心の喪失、生きる意味や目的の喪失など、心理面に影響する重大な問題を抱えるケースも増えている。そうした人々は、多くの場合、この問題を放置することで鬱病やひきこもり、人間不信、対人恐怖症など、日常生活に支障をきたすほど、大きな問題を抱え込んでしまうケースがある。一時期、テレビ番組で美容整形を取り上げたシリーズが高視聴率を記録

したのも、「失われた美の回復」というテーマが人々の関心を呼んだからである。似たような番組は世界各国で放送されている。美容整形が必要とされるのは、人それぞれの価値観の中で、上記のように「美」に関して重大な問題を抱えてしまう人々も多いという現実があるからである。しかし、上記のようなケースは、現代的な「美」の範疇から外れているだけなので、その「美」に近づけてさえあげられれば、つまり、外科的手術で「美」を作り出せば、心理的な問題も解決することが多いのも事実である。現に、自分の希望する美容に近づけた人はほとんど、失った自尊心や生きる意欲などを取り戻し、笑顔が見られるようになったという報告がほとんどである。美容整形の必要性は上記のような必要性から、日々需要が増してきている。

3-3 美容整形のニーズの変化

美容整形は、欠損した人体の部位を、なるべく欠損前と変わらない状態に戻すことが最初であり、社会的な事情と本人のメンタル面を考慮しての外科手術が主であった。顧客のメンタル面を考慮するというのは現在も継承されていて、やはり、高い費用を払ってまで美容整形手術を受けようとする方は、それなりにコンプレックスや、社会生活において不自由さや自尊心の欠如というものを内面に抱えている。美容整形は費用が高いということもあるが、昔では「親からもらった身体に傷をつけるなんてとんでもない」という考え方も社会通念にあったことから、自分の容姿にコンプレックスを抱え、非常な苦痛を抱えながらも、なかなか美容整形の敷居を踏めないという、言ってみれば、美容整形の敷居は非常に高かったのである。美容整形を訪れるには、お金があつて、なおかつ、「社会からなんと言われようともキレイになるんだ」という固い決意が必要だった。美容整形はこれまで保険が使えなかったため、完全自由診療で費用も高額になるのが一般的であった。確かに、現在でも保険適用外の外科処置は多く、現状、美容整形手術は自由診療ということができる。しかし、乳癌摘出手術後の乳房再建術などは保険が適用になるケースもある。ワキガの治療でも保険が適用になるケースもある。これまで、まったくの自由診療であった美容整形に保険適用の分野ができてきたということは、一つの光明といえる。また、全体的に需要が高まるにつれて、完全自由診療とは言っても、昔と比べるとレート自体が下がり気味になっているのも事実である。美容整形はこれまで大きな手術を必要とする要望が大半を占めていた。高額な医療費を支払ってまで受ける手術である、脂肪吸引やフェイスリフトなど、技術開発の問題もあるが、やはり、身体にメスを入れて美容整形するのが一般的であった。ところが、現在はいろいろなハイテク医療機器危機が開発されて、ほとんどメスを使わなくても、つまり、身体に傷を残さなくても外科手術が受けられるようになった。そのため、「全身のスタイルや顔をモデルのように美しく」という憧れから、もっと現実的に、肌を白くしたい、毛穴を引き締めたい、ワキガの問題を解消したい、顔の皺をとって若返りたいといった、個人個人の要望に美容整形が応えられるようになった。美容整形外科クリニックにはこのため、様々なメニューが増えた。昔からある皺取りや脂肪

吸引にもいろいろな手法が取り入れられ、比較的风险の少ない手術法も開発されている。また、「気軽にイメージを変えたい」という理由で「プチ整形」という外科手術を受ける世代が増えたのも最近の傾向である。一重まぶたを二重にするなど、昔なら「そんなことで？」と思われそうなことも、今では本人に与える心理的影響から、決して軽視されることなく、きちんと美容カウンセリングも行なわれるようになっている。

3-4 美容整形におけるランキング

美容整形におけるさまざまなランキングを以下に記述していく。

3-4-1 国別ランキング（2009 年）

美容整形市場における美容医療施術件数の国別ランキングでは、1 位がアメリカ（303 万件）、2 位がブラジル（248 万件）、3 位が中国（219 万件）であった。日本は、6 位（74 万件）という結果であり、美容整形大国といわれている韓国（7 位、66 万件）よりも、件数では上回っていた。しかしながら、人口に対する比率でみた場合は、やはり韓国がトップなのである。

3-4-2 美容整形治療ランキング（2013 年 1 月）

「気になる！美容整形」サイト内による、美容整形治療人気ランキング（2013 年 1 月）は、第 1 位が目元であり、くっきりパッチリ、二重まぶたや希望のアイラインにするために行われるそう。第 2 位が鼻であり、鼻筋を通してメリハリのある顔立ちにさせるために行われ、第 3 位は、しわ・たるみの除去である。

3-4-3 美容整形でなりたい顔ランキング（2012 年）

美容整形「高須クリニック」の高須幹弥院長は、「美容整形でなりたい顔ランキングベスト 60 女性編」（同院調査、2012 年 4～6 月度）の結果を発表した。

1 位は AKB48 の板野友美だった。高須院長のブログによると、板野については「ギャルの間では圧倒的な人気を誇ります。総選挙前から多かったのですが、選挙が終わってからますます増えたように感じます」と高評価を下した。AKB48 の中で、最も商品価値が高いとも評価しており、「ともちんの顔のようになりたい」という女性がたくさん来院するのだという。

2 位はトリンドル玲奈で、高須院長は「ハーフなんだけど、堀の深い目鼻立ち、高くて尖った鼻、シャープな輪郭といった白人特有のきつい感じがなく、日本人の庶

画像 3-1 板野友美



出典：Google+

民的な可愛い女の子に近い顔立ちをしているので、みんなから愛されるのだと思います」と分析している。その上で「同じハーフタレントのベッキーさんや長谷川潤さんやローラさんにはない癒しの魅力があります」と魅力に踏み込んでいる。

TOP10 は以下の通りである。

1 位	板野友美 (AKB48)	2 位	トリンドル玲奈
3 位	佐々木希	4 位	キム・テヒ (韓国人)
5 位	安室奈美恵	6 位	益若つばさ
7 位	沢尻エリカ	8 位	菜々緒
9 位	浜崎あゆみ	10 位	ユナ (少女時代)

3-5 まとめ

世界青年意識調査 の結果と結びつける。

⇒現在の美容整形の多くは、コンプレックスや自尊心の欠如など心理的影響から行われている。

⇒おそらく化粧も同じである

●黄金比率美人説

カナダのトロント大学の Kang Lee が視覚研究の専門誌「Vision Research」で白人女性のみを対象にした研究結果を発表した。そこで女性の見た目の美しさは両目の間隔や目鼻と口の距離が顔全体に占める割合によって決まるという研究結果が発表されている。その研究結果は目と口の距離は顔の長さの 36%の時に一番美しいと感じられ、両目の間隔は顔の幅の 46%の時に一番美しいと感じられることが分かった。

ORICON STYLE <http://www.oricon.co.jp/>

女性になりたい顔ランキング

Livedoor ニュース <http://news.livedoor.com/>

世界で最も美しい顔 100 人

TUTAYA ランキング <http://www.tsutaya.co.jp/rank/alacarte/movie/090713.html>

好きな顔ランキング

美容整形でになりたい顔ランキング

女性はなぜ化粧をするのか ポーラ文化研究所

女性は見た目が 10 割

ニコニコニュース <http://news.nicovideo.jp/watch/nw336841>

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご協力してくださった皆様に感謝を申し上げます。

参照 HP

- 美の起源を探る <http://www.yy-google.info/>
- Infogra.me <http://infogra.me/list/10066>
- 美容整形で人生を明るく <http://biyouseikei.mobileapple.com/sitemap.html>
- YUCASEE media <http://media.yucasee.jp/posts/index/11601>
- ヨーロッパ芸術街道 <http://www.europe-museum.com/>
- 読モニュースサイト <http://www.gsp.jp/>
- BS-TBS <http://www.bs-tbs.co.jp/>
- Yahoo ショッピング <http://shopping.yahoo.co.jp/>
- TI-DA <http://tamihbo76jackie.ti-da.net/>
- amazon <http://www.amazon.co.jp/>
- 京都産業大学文化学科 国際文化学科 石村裕香 論文
[http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~konokatu/ishimura\(05-1-29\)](http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~konokatu/ishimura(05-1-29))
- <http://www5f.biglobe.ne.jp/~homepagehide3/zatugaku/kesyounorekisi.html>